

走ることと座ることのあいだに

座ること、立つこと、歩くこと、走ること、こんな行為や動作の違いについて考えてみる人とは誰なのか。文化人類学者であるか、または整体治療師か、はたまたスタイリストやデザイナーであるとも考えられる。それから、もしもそのヒトがアーティストであるなら、おそらくダンスかパフォーマンスで、自らの身体を媒介に表現を展開しているだろうか。ところがダグマー・パハトナーは、そのどれでもなく、映像、インスタレーションを手がけるアーティストなのである。パハトナーは、もちろん身体に関わることではあるけれども、それを歴史や社会学や生態学など様々な観点から考察し、その過程を学術研究としてではなく、アートの作品に仕立ててみせる。なぜアートでなければいけないのかと問うなら、それはパハトナーがアーティストだからとしか言いようがない。では、なぜアートと一見無関係なことが必要かと訊かれたならば、それらが無関係であることによって、普段意識に上らないことに人々の関心を引き寄せ、そこから様々なことを考えさせることが、アートの役割のひとつだから、とパハトナーは応えるに違いない。絵画であるとか彫刻、写真、オブジェなど、自立したジャンルに収まったアートの作品ではないので、アートか否かの認知はさらに困難だろう。だけど、誰が見てもアートだと思われるそれらのジャンルでさえ、人間の行動や関心のすべてを主題として採りあげてきたではないかと思う。主題ではなく方法論が、つまり主題への接近がパハトナーの主要なモチーフである。しかも最終的には、色彩や光と影、空間の配分など、作品にとっての古典的な要素がパハトナーの作品を支配する。こうして見ればパハトナーの作品は幅広い関心に起因し古典的な美学に帰着するものであることがわかる。

パハトナーは、以前から〈座ること〉の意味や、その行動としてのエネルギーに関心があったという。3年前に日本滞在を体験してからは、日本人にとって座ることにはふたつの方法があるということに、その関心は集中されるようになった。(註1)つまり畳や床に座ること、椅子に座ること、生活習慣や文化的意義として、それらはどう違うのか。私たち日本人にとっては自明のことと思われることから、パハトナーは眼をそらすことができなくなった。一見、日本と西洋の違いをいかにも図式的な関心でとらえているようにも思われる。しかし、先に述べたようにパハトナーの座ることへの関心には、根強いものがある。行動環境や行動心理学にも関わってきたその興味は、当然日本という国の超高速の発展の幅にも向っている。「バック・トゥ・ザ・フューチャー」ならぬ「未来を回顧して」(註2)という展覧会名にも、その好奇心が表わされていた。

青森へ到着したパハトナーは、主題への接近から、と述べたとおり、最初から作品の構想を持ってはいなかった。ただ日本文化における、座ることの意味を考え、座ることを強調するとはどのような行動に表われるかを、書物や周囲の人々へのインタビューで探索し始めた。たとえば茶道や華道、碁や将棋など座るという行為なしでは成立しない文化の形態や、また武道や相撲などスポーツに表われる身体の動きの差異についても、資料を漁ってみた。さらに椅子の生活にも注目した。西欧の生活様式を採り入れたものであっても、どこかに日本にしかない独自の椅子の要素があるのではないかと、椅子のデザイナーや工場を尋ねて廻った。しかし最も直裁にパハトナーを導いたのは、やはり始めから当たりをつけていた座禅の文化であった。とくに青森市内の禅寺を訪れその住職から座禅の組み方と意味を教授してもらい、さらに座布を入手してからは、書物で学んだ禅の意義を身近に体験することができた。(註3)

これらの調査が原動力となって、青森での制作が始まったのだが、ここで、パハトナーの過去の作品を振り返って、西欧文化の文脈のなかで、座ることをどのように対象化してきたかに注目してみたい。

「用意された椅子はいつも小さすぎる」(図1, 2)は、小学校の建物をはさんだふたつの庭に、巨大な椅子と、

子供にとっても小さい椅子とが対比的に置かれたもので、それらはガラス張りの建物を通して透視できる位置にある。活動的な子供にとって、座る時間は忍耐を要する、つまりエネルギーを必要とする行為である。小さな椅子はエネルギーを象徴する赤色で作られている。そしてまた椅子とは社会的地位を象徴する言葉でもある。巨人サイズの願望を表わす大きな椅子のほうは、座る部分が空で、子供たちの将来に託された期待は現実を超えた実現不可能な夢であることが仄めかされている。子供とその将来は、もちろん私たち人類の現在と未来の隠喩である。

このような文明批評的意図の集大成は 2002 年、パハトナーの居住地ランツフートの街の教会美術館全体を使った大規模なインスタレーションの個展「横断/違反」で実現された。(図 3-7) 教会の身廊から側廊や周歩廊など床の部分はほとんど土で覆われ、その上に蒼いネオン管とガラスの破片が盛られている。観客はその床を歩くことが不可能なため、階段が組まれ、段上からそのインスタレーションを眺めることになる。土の上には、白い人形が何体も横たわる。見渡すとそれらの原型と思われる、1 体のみ肌色をした人形が発見される。他の 23 体ある白い人形たちは、後額にバーコードを持ち、大量生産されたレプリカだったことがわかる。座るという主題から離れたが、文明への警告に近いものが込められたこの作品では、土やガラスや青い光にも、何らかの意味が載せられているだろうと推測できる。

「ホモ・ディッセンス」(異議を唱える人)(註 4)と名づけられた作品(図 8)は、パハトナーが今回来日直前に制作した試作段階のものである。右から左へと 5 枚並んだ写真は、パハトナー自身がモデルであるが、座っている状態から、立ち上がろうとし、直立し歩き始めるという 5 つの異なる姿勢が示されている。タイトルからの連想でなくても、「ホモ・エレクトゥス」から「ホモ・サピエンス」へと向った人類の進化と何らかの関連があろうと予想される。横に並べられている図版は普通左から右へと視線を進めるので、皮肉な読みとりをするなら、進化ではなく退化の図とも言える。この作品は、社会学者フロリアン・ローツァーが最近発表した「ホモ・セーデンス」(座る人)という語(註 5)にヒントを得ている。ローツァーは現代人が TV やパソコンの前で座って多くの時間を費やしているということ、皮肉ではなく知的進化として指摘したのであった。作品の画像処理のためにやはり多くを PC の前で座って過ごすパハトナーには、疲労を招くこの作業が人類の未来にとって肯定か否定か判定しがたい思いを抱いているに違いない。

来日の直前であったから、おそらく日本語の本来の縦書き、右から左へという読み取りの違いも、異文化を解く鍵とも思われたようだ。西欧の進化論とは別の時間の進行があるのでは、という東洋文化への期待！はパハトナーにとっても複雑で、現代の日本が、文字や図の読み方と同じく、あらゆる生活や文化の習慣において旧来の様式を変えてしまっていることも識っている。日本はコンピューター王国なのである。

これまでの作品の様々な要素が、今回青森で発表された「座ること」につながってきた。「座ること」は、床の上に整然と三角形を形作って並んだ白いクッション、壁のスクリーンに大きく投影された走る人の繰り返し流れる映像、反対側の壁に映された大きな椅子の影、その影の実体である天井からぶら下がる椅子の 4 つの部分からなる。白いクッションは、青森の禅寺で入手した座布を元に、アドバルーンに使うビニール風船で作られている。座るためのクッションなのに、中空で弱い素材からなり、座ることは不可能、天井から下がる椅子も、座る部分が空で、やはり座るためのものではない。白いクッションとともに、対照的に小さな椅子と巨大なその影は、大きさで座れないことの矛盾によって、逆に人々に座ることの意味を問いかける。さらに目的不明の走行を続ける中性的な黒い人物は、走ることと座ることの違いを浮かびあがらせ、人はなぜ走るのか、座るのかを、作品の前に立ち止まって考えてみよう私たちに促す。あなたはいつも走っているか？何のために？そして、どこ

まで？ 座りたくなるのは、どんなときか？

パハトナーは、このように人間の生活や行動の中のふとした違和、そして異文化間の共通点や相違点をアートの文脈に導入する。普段私たちが無自覚でいる我々自身の文化の特質を導き出すのは、このように矛盾や違和に対してを距離を置いた視線である。ただしこの距離は微妙である。定点観測から差異を暴き出すには執拗な時間がかかるものだ。

(註 1) 2001 年「ドイツにおける日本年」関連企画のために来日し、3 週間滞在している。

(註 2) 上記来日時に青山ギャラリーで開いた個展“Looking Back To The Future”

(註 3) 鈴木大拙著『禅と日本文化』英語原版では、日本語訳にはないが、ロダンの「考える人」と禅師石格の胡坐をかく図の比較がなされている。そこには東洋の座り方が、「地面との接触をもって」おり、「我々が寄って来るところの存在の源につながっている」と書かれていた。(Daisetz Suzuki “Zen and Japanese Culture”, Charles E. Tuttle Company, Inc. 1959, pp.104-105)

(註 4) 「ホモ・ディッセンズ」は、パハトナーの造語。

(註 5) ローツァーはフリーランスの批評家。哲学・美学とくにメディア理論の批評を手がけ、ドイツの美術誌 KunstForum の寄稿者として知られる。またオンライン・マガジン「テレポリス Telepolis」を主宰しており、件の論文は、その 1997 年 2 月 22 日号に発表されたものである。